



うまくいかない日もあっていい

園長 野中 泉

子育ての過程には、一生懸命がんばっても「うまくいかない」ことが、結構あります。生まれたときはあんなにうれしかったのに、「夜泣きがひどい」、「離乳食を食べてくれない」「なんでもイヤイヤいう」と、あっという間に壁にぶちあたります。その後も「歩くのが遅い」「言葉が出ない」「友だちを噛む、ひっかく」と続いて、その度に、愛情不足なんだろうか、育て方が悪いのか、親として自分はダメなんじゃないかと、自分を責めたくくなります。もう少し大きくなると、学校の成績にも一喜一憂するし、我が子が運動ができなくても落ち込むし、友だち関係でつまずいたり、ましてや学校に行きたくないなんて言われたら、ほんとうに自分の子育てに自信をなくしてしまう。親としての挫折は、思っていた以上に次々にやってくるのです。

アトムでも、毎日何人ものお母さんからそんな悩みを聞いてきましたし、実をいうと、私自身もそんな親のひとりでした。今でこそ、そんなことあるわけはないよと思いますが、若い頃は子どもというのは大人が愛情をたっぷり注いで育てさえすれば、すくすくいい子に育つと思いついていたので、子どもにうまくいかないことがある度に、「自分のせいかな」「私の愛情のかけ方が間違っているのかな」とひたすら落ち込みました。

でも、立ち止まって、冷静によく考えてみれば、変な話だと思えます。お母さんたちはよく「普通と違う」ことを気にしますが、勉強もできて運動もできて友だち付き合いも上手で、親や先生の言うこともよく聞いてと、そんなスーパーマンみたいな子は「普通」どころか、滅多にいません。親である自分は苦手がいっぱいあるくせに、子どもにだけ完璧を求めるようになるのはなぜだろうと思えます。そもそも人が育つということにおいて「うまくいく」って何よ、と思うのです。離乳食をちゃんと食べてくれることか、友だちとトラブルがないことか、勉強ができることか。園や学校に行くことを嫌がらないことか。もっと言えば、人生は「うまくいかない」日があっちゃんのかいかいとも思えます。人が生きていくということは、そんな単純なことではないはずです。

私は、40代の初めころ、職場の上司との関係がうまくいかず、適応障害という病気になりました。症状はいわゆる「うつ」だったのですが、はじめのうち私は自分が心の病気になったことを認めることができませんでした。心療内科の先生に休養が必要と診断されても頑なに仕事は休まず、結局無理をしすぎて最後には仕事どころか、布団から起き上がることさえできなくなって、文字通り何もできなくなりました。誤解をおそれず言わせてもらえば、小さい頃からいわゆるいい子、優等生で、仕事も家事もできる人間だと過信していた私にとって、そんな自分を受け入れることは、とても難しいことでした。ポロポロになった自分を持って余した私は、心配して夕飯のおかずを届けに来てくれた近所の友だちの前で、こんなふう泣きました。「ごめん、もう私はなんの役にも立たないダメな人間になってしまった」。すると、その友だちは「だから何？今まで、役に立つから友だちやったんか？」と、そんな私を笑い飛ばしてくれたのです。

私たちは、ともすると、順調であることや、うまくいくこと、間違わないことばかりを大事に思いがちです。特に親になると、なぜか子どもには「転ばぬ先の杖」を過剰に渡してやりたくなくなってしまいます。小学校に行ったら勉強についていけるように早くから塾に。英語やスイミングも友だちに後れを取らないように早めに習わせよう、持ってないと友だち関係で孤立するから携帯もゲームも買ってやらないと、その心配の「杖」はつきることがありません。でも、アトムで、けんかしたり、間違ったりしながらたくましく育っていく子どもたちの姿を目の当たりにすれば、子どもたちが、本当に欲しがっているのは親が勝手に用意した「杖」じゃないのになと、つくづくわかります。子どもたちは、ただ、転んだ時には「痛かったね」とその痛みをわかってほしいと思っています。「がんばって、自分で立てるよ」と励ましてほしいと思っています。「大丈夫、転ぶこともあるよ」と人生の先輩として大人がどーんと構えて見守ってさえいれば、子どもたちは涙をふいて立ち上がり、また自分の足で走り出す力をもっているのです。

また春が来て、みかん組さんの卒園が近づいてきました。アトムを離れる子どもたちと親たちの新しい明日が、「うまくいくように」と願うのではなく、「うまくいかない日があったて、大丈夫やで」と笑って送り出したいと思えます。